

講演：「外国籍住民の災害救援に係る行政とNGO・NPOのネットワークについて」

講師：新潟県長岡市国際交流センター長 羽賀友信 氏

おはようございます。ただいまご紹介にあずかりました羽賀でございます。

まず、最初に震災時には皆さんに大変ご尽力いただいたり助けていただいたりということでお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

もう一つですね、きっと皆さんは長岡はだいぶ復興したんじゃないかと思われていると思うんですが、実際のところ仮設にまだ3分の2が戻っておりません。残ったままです。残った人たちは、高齢化が進んでローンが組めないなどいろいろな問題が現実的に複雑化して残っている方々です。子どもたちの心理的な状況はますますひどくなっております。それは震災からダイレクトに受けたショックよりも、むしろその後、希望を失った家族がいさかいを起すその家庭の中の二次的なトラウマがだんだん子どもに影響を与えてきているということです。家庭が離婚をしたり、いろんな複雑な問題は時を経るにしたがって長期化してきています。そういうことを前提に私どもが地震の前に考えていたことと、実際体験したらあまりにも違うということ、我々の体験を通して皆さんにお伝えできたらなと思います。細かいところはまた皆さんのところで地域特性があると思いますので、ご配慮いただければいいんですが、まず一つです。震災がいつくるか。これはいつかくるとは思っても「今」とは誰も思っていないと思うんですね、でも神奈川は緊迫感があって我々とは違うと思います。

長岡の場合は、40年前にも震災があり、新潟地震、私も体験してたんですが、まさかこんなに早くまた長岡にくるとは思わなかったんですね。長岡には紙に書いた餅のような防災マニュアルがちゃんとありました。真黄色になってそこには外国人の一言も入っていない。そんな状況なのです。新潟県は非常に広い県ですが、国際交流協会があるのはたったの3つです。長岡、上越、新潟市。では、その他の市町村で、もし起きたらどうするかということが今回起きてしまったわけです。その地震以降、長岡に合併されて山古志村も長岡市になりました。けれども、あの時は村だったんです。多分皆さんの神奈川県というのは中山間地もお持ちだし、もう一つは都会、横浜のようなところもある。全く災害の種類は変わります。どうしてかというと、都会部、神戸のようなところは特にそうでしたが、震災が終わってしまえばアクセスが残っているので、すぐに復旧の手が入れるのです。でも山古志村のように、入り口と出口がたった2箇所しかないとそれが絶たれた瞬間にすべて終わってしまうのです。ですから都会型が二次元型の面の展開であれ

ば、我々は非常にアクセスが限られている三次元型で、孤立しやすい。また、四次元型にすぐ移行する。10月23日に災害があって、11月に入ると私のところでは雪が降ります。今朝も私、出てくるとき気温10度以下でした。でもこっちに来ると小春日和というか、のどかで暖かくていいなと思うくらい違うんですね。だから私一人コート着てなかったのですが周りにはコートに襟巻きをしている、そんなところなんです。一番怖かったのは実は7.13水害が長岡にもあったんですよ。これで被災した人たちがすぐ次の地震で被災してそのあと、11月に降雪の対策本部が立ちました。ですから長岡市はたった半年の間に3つの対策本部が立ったんです。元々は半壊で済んだ家がそこに避難勧告が出て戻れなくなったとたんに雪の重みで全壊しました。山古志村というのは長岡市になっても私のところから30分走れば行けるんですが、積雪量は4mになります。年間15回の雪降ろしをやるんですが、こんなところで雪を放っておけば、あっという間に家は潰れてしまう。そこを支えていたのがどんな人たちかというと、70代、80代のおじいちゃん、おばあちゃんです。

もう一つはマニュアルをつくっても、実際は、そこに誰が来るかで全てがスタートするということです。私のところも、みんな来てくれるだろうと思ったら駆けつけたのは私一人だったんですよ。来れなかったんです。職員のうちの二人は家が全壊しました。そうしたらもう来れないですね。お年寄りや家族の安全を確保すること等で、若い人がとられてしまうんです。そうすると、こういう時にはどうするのか。それから新幹線。たまたま土曜日でしたから出かけていた人が多かったんです。新幹線が止まり、帰ってこれない。道路もトンネル1本が落ちただけで、全部国道が止まってしまいました。で、急遽、東京から新潟までの航空路線を開いてもらったため、何とか入れました。後は会津回りで入ってくるということだったのですが、すごい人は自転車で峠越えをして駆けつけてくれたんですね。でも、せっかくこっちに入っても今度は道路が決壊してまた入れないというそんな状況でした。ですからマニュアルというのは仮の姿であって、一番大事なことは全体状況を把握できる人を誰にするかということです。そこに駆けつけた人でシステムを立ち上げていく。

その最たるものが実は避難所です。日ごろ、避難所はここです、担当はこの人です、と言っている、何時、何曜日、いつの時期に災害が起こるかにより、担当はそこに行き着けない場合があります。ですから、そこにいた人が、急遽担当にならざるを得ない。それから、避難所は半分は全く想定外のものになります。長岡で僕がびっくりしたのは、ビニールハウスが避難所になっていたことです。町内の人全部顔見知りで、300人も入れるんですね。元々が暖めるためのも

のですから、ストーブ機能が付いている。冷えた夜でも大丈夫。地域の顔が見えていると、家の復興や片付けに人が行ってしまったとき、何人かの若い人が残っているだけで、痴呆症の老人の面倒も見れる。子どもたちの面倒も見れるんですね。そうするとここにまた新たなコミュニティができる。緊急時というのは、日常の社会が消滅した状態ということですよ。自分の住所もなくなります。それで私がなぜ外国人問題が一番大事であるかということ、今、多文化共生が言われていますが、その中にはお年寄り、子ども、障害者も全部入った多文化共生でいいと思うんですね。その中の一つのカテゴリーに外国人というハンディを負った人たちが入る。でも大事なことは、この人たちが自助努力ができる範疇をどれだけ大きくしておくかということです。

長岡は地震当時2千人を超える外国籍の住民がおられました。一番のグループは700人強の中国籍です。次が500人強のブラジルの方なんです、この2カ国ともほとんど地震と縁がありませんでした。ですから長岡市に来られると、「ようこそいらっしゃいました」と、生活マニュアルを差し上げて、その中に防災マニュアルが入っていても地震を知らない人は読む訳もないし、そんな厚いものを手元に置くわけじゃないんですね。大きな矛盾だったのですが、今日の資料でもまたご紹介しますけど自助努力ができなければ何もできないんです。

行政は動くまで3日かかります。その間は自分で生き抜くしかないです。日本人は防災教育受けていますから、地震が起きたということがまずわかる。余震がくるということもわかる。避難所に行けばサービスが受けられ、安全な場所であるということがわかっているんです。これだけで自助努力になるわけですが、このいろんな国籍を持たれた方たちは文化的なバックグラウンドが違っただけで、我々とは違う世界に入ってしまう。特にブラジル系の方は感性豊かなラテン系ですから、震度6ではないです。心理的には震度10ぐらいになります。だから私のところ電話が即来て「羽賀さん、世界が壊れた!」と。まさにそのとおりだったと思います。神戸のときにはフィリピンの方がクーデターだと思ったそうです。あれは爆撃だろうと。で、それみたことか、その後に軍服を着た軍人がいっぱいいるではないかと。でも不思議なのは銃をもってないぞ、という話からこれおかしい、クーデターじゃないということで、ですから、この文化的な違いというのが実は大きなハンディになるということです。

私たちは日常、地震が起きましたと外国籍の方に伝えたとしても、「地震って何ですか」と言われてしまうかもしれません。だから一つは多言語の中に必ずやさしい日本語を入れる。それは文化的なバックグラウンドが違う方に、どういうふうにイメージしてもらえるかということです。

「大地が揺れてます」というのが地震なんです。余震というのは、「これからもまだ揺れ続けま

す」ということです。避難所は、いろんなサービスが受けられるし安全な場所ですよ、ということを行わなければ伝わらないんです。私たちにはわかっている日本語で「避難所」と表示をしても、彼らにはなかなかわからないということです。

正確な情報をどういうふう到手渡すか、それと防災の基本は事前協議です。なぜならば災害はすべて行政枠を超えて起きてきます。でも支援はどこでできるのか。行政は、自分の行政枠だけでここから線引けばいいのかというと、そうではないんですね。日ごろのコミュニティが壊れると人は大きな町にバアッと入ってきます。そうすると周辺の小さな市町村も自分の枠に入れて考えなければなりません、そういうところには多分日ごろ、担当が一人か二人しかおられません。その場合は災害対策室に人を出してしまうと、誰もいなくなって、もう打ち捨てられてしまうんですね。

災害の側面には、一つには地震そのものがあります。もう一つはジャーナリズム災害です。これ比重的にはどっちが上かと言えないくらいすごいです。私も仰天したのはNHKさんだけで300人入ってきました。新聞社が30数社です。対応しているのが私一人です。真っ先に大使館から猛烈な問い合わせがきます。うちの国の人たちは亡くなっていませんか、ケガはしていませんか、無事ですか、どこにいますか・・・全然分かりません。ですから自助努力という中で避難所に到達していただかないと我々は把握はできないんです。ですからここまでが自助努力でできるということを、日ごろ事前協議も含めてやっておくべきなんですね。そのためにはいろんなツール開発がものすごく大事になると思います。

今日は横浜市国際交流協会さんもきておられるんですけど、私たちが地震が起きたときにとっても助かったのは、9言語で書かれた表示シートをすぐ送ってくださったんです。そうすると、それを避難所に貼っただけでそこにきた人は「あっ、我々は見捨てられてない」という一歩から始まるんです。でも表示がない、音声もないとなると、我々は捨てられた、と思う人が非常に増えてきます。それから私たちがとても勘違いしてたのは、地元で言語系のボランティアを育成してましたが、何と蓋を開けたら一人もきていないんです。それは来れないんです。自分の家が被災して、ボランティアを優先する方はおられないです。まず自分の家族を見なければいけない。ですから、私たちは地元の育成したボランティアを自分のところで使うという発想を持っていますけれど、実際は協定を結んだ近くの人のために育成するんだと思い、災害時は、他の地域で育成されたボランティアを送ってもらうしかないんですね。これをしないとだめです。

それと神戸地震から大きく変わったのはIT環境です。電話はすぐにだめになりますが、最初

に復活してくるのはメールで、今はKDDIさんが協力してくださって、すぐ情報がとれるようになりました。そういうツールをどう使うかということ、日ごろやってなければ人間はパニックになったらできません。うちの職員にも、私は日ごろ、大変なことがあったらこういうふうにして、と全部話しており、「はい、はい」と彼らも言っていたんですが、それは頭で理解してたんです。実際、震災がバアーンとおきた瞬間にうちの職員が何をしていたかという、呆然と立っただけなんです、こうやって。実際パニックが起きた瞬間、人間は小学校の低学年程度の能力になります。で、うちの職員にラジオも全部だめになったので、車を持ってきてカーラジオをつけなさいと言い、彼は行ったのですがパニックになってしまい、車の鍵が差し込めないんです。そんな状態になるんです。ですから、マニュアルは我々がこうやって落ち着いた中で作っていると、これが機能するだろうと思っているのですが、その人の気質によっても機能しなくなります。災害が起きた初期では、必ず小学校低学年ぐらいの動きしかできません。それから文字は理解ができなくなります。そういう中、我々もツールを開発しました。実はこれ長岡では今、どんどん配っているのですが、一年かけて作った避難シートです。この材質は投票用紙です。だから水にも強いし、引き裂きにも強いです。これのミソはA4を折ってあることなんです。こちらには多言語で文字が書いてありますが、基本的に災害が起きた瞬間は、理解できません。ですからこちらには、すべてピクトグラムという絵文字で書いてあります。これを一緒に折ります。折って輪ゴムでパスポートに止めてください。とにかく地震に関係のなかった人でも、これがパスポートに入っていれば、そういえばもらったなと思い出してもらうだけでいいんです。これは第1ページは、地震が起きました、揺れている、という絵なんですね。次は、ガスを止める、電気のコンセントを抜く。火が出たらすぐ119番を呼ぶ。その次はやってはいけないこと。車で逃げる、神社に逃げる、高い建物の下にいくとガラスが降ってくる。一番最後に避難所のことが書いてあります。避難所に行ってください。どんなサービスが受けられるかが書いてあります。皆さんのお手元の資料の中にその裏と表が入っていると思います。ここに入っていますね。

一番のミソは、実はこの一番最後のページなんです。これは実はご本人のためが半分、それから周りにいる日本人のためが半分なんです。言葉がしゃべれない困っている人がこれをもってこうやると、一番下に「私を避難所に連れてってください」と書いてあります。これで避難所につれてってもらえばいいんです。でもここには、氏名と住所が書いてあります。もしご遺体になったり、重傷になってしまったらここでわかるわけです。その次に最寄の避難所は、ご近所の人にこれを持って聞きに行ってもらいたいということです。だから何かあったら、こんな人が近所にいる

と分かるんですね。避難所はここだよ、と教えてもらっておくということです。その次は国籍は書いてないんですよ。国籍は意味はないです。どうしてかということ、その人がどんな言語がしゃべれるか、日本語がしゃべれると言ったら、日本語がしゃべれますと言ってもらったらほうがいいんですね。ですからここには私が話せる言語と入れてあります。3つ目は大使館ですね。これで国籍は分かります。それから次が国内の緊急連絡先というのをお友達か親戚かもしくは職場か、大学かということですね。それから最後が国外。大使館に連絡をとれるということです。ここまでやっておく最後にこうやって出すだけで逃げられると我々は思ったんです。私は、地震が起きた際、避難所を回ってみて、避難所にいる人が少ないということが衝撃だったんです。ですから、その時にこれがあればあの時の3倍は入ってもらえたんじゃないかなと思うんです。

皆さんのお手元の資料の中に避難のグラフが入っています。これです。これをちょっとご覧になってみてください。地震が起きて、まず何をするかと。日ごろ私たちが外国人支援をしている私の国際交流センターが使えなくなりました。亀裂が入って倒壊のおそれがあるということで、電話の転送もできなかつたんです。日ごろは外国籍の方には全然縁のない市役所に、我々は移転しましたが、誰も来ません。いつも出入りして相談業務をやっているところにみんな来ます。ですから皆さんに覚えていてほしいのは、災害時に二つのことがおきます。それは誰を思い出し、どこを思い出すかということです。このためにいい交流をやってなきゃいけないということが基本として大事です。

それから日ごろのつきあい、いいものも悪いものも増幅されます。お嫁さんとして新潟の場合はたくさん中山間地の山村に入ってられるんですが、結構もめているケースが多かつたんです。今回、乳飲み子と奥さんを放り出した人もいました。言葉もまだ達者でなく初めて体験した地震の中で不安で、ボランティアの人が行くと、泣き始めました。こういう人たちを孤立させないということが、ものすごく大事なんですね。

それから留学生の活用ということは私は事前協議で是非、やってほしいと思います。残念だったのは長岡に科学技術大学があり、170人を超す留学生がおられたんですが、彼らにお願いすれば、多言語は何とかなると思っていたら、大学は「出さない」と言つたんです。彼らの安全の確保のためにボランティアとしては出せませんと。なぜなら余震が新潟の場合続いていたからですね。そこに入ることは、危険だからです。ものすごくショックを受けました。新潟県の場合は、特にポルトガル語がしゃべれる通訳さんというのは私のところの相談員一人だけだったんですね。こんな人材で全てが賄えるわけないんですね。で、考えたのが全国ネットをどう結ぶかとい

うことだったんです。地震のすぐ翌日に多文化共生センターというこれは神戸で地震が起きたときに立ち上がったNPOですが、ここからすぐに連絡がきました。「羽賀さん、俺たち手伝いにいこうか」と言うので、とにかく来てくださいということで私、現地を見てもらおうということで集まってもらったんです。運が良かったのは、その前に2回全国会議をやっていまして、それは国際交流と協力の実践者全国会議ということでかなりの人数が集まって顔が繋がっていたんです。いくら事前協議をやっても顔が繋がっていなかったらだめです。あの人から電話がきたから「それっ」というふうにはなかなか動かないです。私は彼らに説明するために、オートバイで前もって全域を回ってみました。で、NHKが発表した被害はずれているということがわかり、愕然としました。ジャーナリストが入ったところは大きく取り上げられているのですが、一番被害が大きかった川口町と山古志村は取り上げられていませんでした。初めてその被害が明らかになったのは、二日後でした。対策を立てる僕らとしてはリアリティが必要なので、皆さんの中で機動性を持った部隊を作らなければならないということです。連絡網が壊滅し、電話も通じなくなり、電気もこなくなった時に、多言語を使えるバイク隊が一番いいですね。それから皆さんが、災害救援センターを立ち上げたときに、スーパーバイズのできるスーパーバイザーをどう育成するかということも大事です。それは今いる人材で、すぐにやらなければならないことに対応できる人で、顔の繋がりがあがる人。地域のことに詳しくないとだめなんですね。橋が落ちました、国道が落ちました、という場合、どの橋がだめだったらどこへ抜ければいいのか、というイメージをもてる人でないと救済は難しくなります。そういうことも含めてスーパーバイザーというのを何人が育成したほうがいいと思います。その人が家の下敷きになったり、その人自身が被災者になった場合には代替が必要になります。それから場所も、日ごろどういうふうを組み立てをしておくか。そこで交流業務が重要になってくるんですね。日本語の支援をしていたり、相談機能があったりということで、ようやく皆さんのイメージの中に災害センターという形が立ち上がると思います。この図を見ていただくと、ようやく3日目に我々は立ち上げをしています。私たちがびっくりしたのは、問い合わせが各大使館からきてジャーナリズムからきて、いったいどこに行ったんでしょうと私たちが聞きたいくらいだったんですね。我々は数人しかスタッフがいませんでした。そのスタッフで2千数百名をどうやって管理できるかということなんですね。できません。ですから、自助努力が必要なんです。3日目から私たちは避難所のローラー作戦を開始しました。120数箇所の避難所を全部昼間回りました。市の職員はそこにいましたが、電話を入れると、「いや、外国の人はいませんよ。」と言うのですが、アジア系の人は皆同じに見えてしまっ

てわからないんです。私たちは慣れているから分かるんですが、私たちが行ってみると、あそこにも、ここにもいるということで、確認をして小さなグループは一つになるようにだんだん大きなところに集めてったんですね。そうすると連絡もしやすい。それから彼らの支援もやりやすい。通訳も一人で済むというかたちをどんどんとっていきました。その開始がこのグラフの一番最初です。

それから少しずつ口コミで入ってくる人が増えました。ピークは400人でした。ところが600人ぐらいの人たちは、近くまで来ていたのですが、車の中にいました。後でわかったのですが、避難所の中に怖くて入れなかったそうです。それが文化的な受け止め方一つで変わってしまうという理由です。ですから、私たちが避難所をどういうふうに彼らに説明するかということに苦心したのが、この避難シートなんです。駐車場にいた人たちのエコノミック症候群というのが問題になりましたけど、今もドクターたちがチェックすると、あの時の血栓は残っているのだそうです。2年経っても消えないということは永遠に消えないのではないかということですよ、それからもう一つはブラジル系の方が一番パニックになられたのですが、母語を聞かせてあげるということがものすごく大事です。領事がこられたときに私はすぐにラジオに出てほしいとお願いし、地元のFMを活用しました。多言語でもってやろうよということで準備を始めたんですが、うちにはその翻訳機能というのがまだなかったんですね。それですぐ領事に出ていただいて、我々がいるから安心しなさいと言ってもらったとたんに皆さんのパニックは半分以下になるんですね。ああ、声の力ってこんなにあるのかと。ですから我々、日頃、メールに慣れていますが、メールには感情が入らないです。でも声はよく通ります。心に響きます。特にこういうときには。だからラジオの活用、オートバイの活用、それから自分のところだけではない他地域の言語系のボランティアの育成。こういうことがものすごく大事になります。それからツールをどういうふうに開発して自助努力をどれだけ拡大しておくかということ、日頃どれだけ地元の人と顔が繋がるような仕掛けをつくっておくかということなんですね。残念だったのは、せっかくFMの放送を開始しても、日頃、FMを聞いていませんからFMラジオがなかったんです。ライフラインが復活すると皆さん家に帰り始めます。そこまでが緊急時と呼ばれるまでなんですね。さて、家に帰って行ったが、どこに帰ったか分からないんです。そうすると、ラジオ以外に連絡のしようがないです。それで私たちは神戸にお願いして600台の寄付されたラジオに何時から何時まで周波数はここに合わせればこのラジオが聞けますよ、と多言語のシールを貼ってどんどん配ったんですね。それが一週間目を過ぎてからのことです。

この一気にグラフが下り始めているところが、ライフラインの復活と同時にこれぐらい人が減るということです。ここで今度問題になるのはこの残った少数者で、どういう方かという家が倒壊してしまった方たちです。仕事を無くしてしまい長期化する問題がこの中に入ってくるんですね。ですから同時並行で我々は今度、共助、公助ということも中期支援、長期支援という目線でやっていかなければいけません。その中には義援金の分配も入ってきます。それから仮設住宅に入るにはという具体的な問題が入ってきます。まず、皆さんに一番やってほしいのは、IT環境で遠いところで能力があるところをいくつも多層、確保しておくことです。私たちは、すぐ翻訳をしていただき、横浜さんには助けられました。災害対策本部では、すぐホームページを立ち上げるんですが、それが翻訳されなければ通じないわけです。ですから、他所にお願いするしか僕らにはなかったのです。そのときに武蔵野さんとか神戸さんとかいろいろな得意技を持った人たちが関わってくれ、それが翻訳されてきます。ただ、時間差があるんですね。30分で返すところと1時間で返すところと、2日、3日で返すところ・・・緊急性のあるものは早いところにまわし、スポット的なものや恒常的な情報であれば、遅いところ、という具合にお願いしました。

また、弘前大学の佐藤研究所がやさしい日本語というのをやっておられます。これは日頃皆さんが交流活動の中で是非、活用されたほうがいいと思います。私たちがゆっくりしゃべれば易しい日本語だと勘違いしていました。「羽賀さん、地震ってなーに」と。津波って何ですかって。それが佐藤先生のは絵も入ってきますし、非常に分かりやすいユニバーサルデザインになっています。また、非常に大事なことなんですが、ガセネタが飛び交います。NHKのラジオ放送が今年81年目に入りますが、あれは関東大震災での虐殺を教訓に正確な情報を流そうということでできた放送ですよ。長岡でも情報の錯綜がものすごくありました。特にこういう時は、したり顔で嘘を言う人がいっぱいいるんです。一番困ったのは中国の留学生でした。日中関係が悪かった時だったのです。ある私立大学は140名の中国系の留学生をとってたんですが、彼らは仕事をしながら日本で苦勞して学校に通っています。ですから一番安くて壊れそうなアパートに入っていたのが彼らでした。また、地震を知らなかった。彼らが図書館の本館のところを通ったら、そこに電気がついてたんでたむろしていたのです。ものすごい人数でした。人は雑踏に呼ばれて、また雑踏ができるんですね。近所の人たちがどんどん集まってきて、館長は急遽そこを避難所としました。そこで、皆さん、いろいろな方法でパニックの解消をされました。ブラジルの人たちはラジカセを持ってきて、夜、そこでサンバを踊り始めました。不安でどうしたらいいかわからないと言って仲間でごうやっている。中国の方たちは猛烈に甲高い会話を始めました。一晩中八

イになった会話をするんですね。そうすると周りの人たちが寝れなくなってしまう。苦情が二日目になって館長のところに行き、館長は、穏やかに「こうやっている则皆さんに迷惑がかかっていれなくなるから、声を落としてね」と言ったのですが、即、彼らのうちの二人が大使館に「今出て行けと言われてています」と悪意に満ちたメールを流したのです。総務省を通して、県庁を通して、市役所から私のところへ「何やっているんだ」と、返しがきたんです。即、私は現地に入って通訳のできる中国人の大学の先生をお呼びしました。その二人は逃げてもういないんですよ。もう一触即発です。こんなことで国際問題になりかねないですね、たった一人、二人の出来心で、こんなに大事になるとは彼らも思っでなかつたので、恐くなつて逃げてそのまま中国まで行っちゃったんです。もう二度と帰つてこないです。でも他の人たちに聞いたら「そんなことは館長は言っでない」と。でも、まずかつたのは、ジャーナリストがいてそれを書いたら事実として報道されてしまうんですね。ジャーナリズムというのは、僕は正義に溢れた人たちがそういう視線でやっていると思っでいたのですが、違ふんです、悪意に満ちているんです。私、びっくりしたのは、悪い記事のほうがいいんですということであら捜しをするんですね。そして、猛烈な問い合わせが私のところへきました。「いったいどうなつているんだ」と。「お前のところは人種差別しているのか」と。ジャーナリズムは、その後のフォローはしてくれないです。私は、大学の学長と、中国大使館と、航空会社との三者が3分の1ずつ出し合つて、恐くてしょうがない、ここにはいられない、という人たちを一カ月間、中国に里帰りができるようにしたんです。そういうことは、誰もとりあげてくれません。非常に残念でした。問い合わせは相変わらず、お前のところは何をしているんだということなんですが、ちゃんとやっていると言つても、新聞に書かれたほうが事実、正義であつて私が言っていることは言い逃れというふうになるんですね。もう一つは、新幹線が壊れた時に、僕の仲良しのオーストラリアのお嬢さんから電話があり、「羽賀さん今、母が来ていて、明後日にはオーストラリアに帰るんだけど新幹線動きません。どうしたらいいだろう」と言うので、僕は「手配してやるからすぐに来なさい」と言つて市役所につれてきました。で、そこに場所を確保してあげて彼女は「じゃ、ボランティアをやるね」と言つてやってくれたのですが、始めから記事をどう書くかと決めていた新聞社が来ていたんです。だから悲惨な状況を探してたんですが、たまたま彼女が「困つてます」と言つたのを実名を入れて書くと、またものすごい反響がありました。孤立する外国人。違ふんです、だつて私と一緒にボランティアしているのに何でなの、と。私は翌日、彼女たちを新潟空港経由で無事に国に帰した。猛烈なお礼状がきました。そのときに僕のところでボランティアをしてくれたカップル

が結婚したんです。オーストラリアに新婚旅行で行くといったら私たちは、あんなに海外で大事にされると思わなかった、ということで彼らの新婚旅行の費用全部そのお母さんが持ってくれたんです。こういうのは記事にはなってないんです。悲しい話です。で永遠に「孤立する外国人」というのが中越大震災と検索すると出てくるんです。そこで、私は逆にマスコミを使ってやろうと思ったんです。私たちには人材がない。でも、日本のこういうところに私たちをサポートしてくれたこういう人たちがいる、というのを発信したくて、NHKの首都圏放送にお願いしました。ですから横浜さんのその多言語表示が、どんなかたちで皆さんが一生懸命翻訳をやってくれたかという取材が入りました。武蔵野にも神戸にも入りました。神戸のFMワイワイが翻訳したのを長岡のFM長岡に送ってくれているその姿と、私たちが被災しているのと連動して出してくれたんですね。こういうふうな使い方をすると、全国ああそうかと思ってくれるんですが、そうじゃないと本当にゴシップの中に埋没して本来業務が全然動かなくなります。ですから事前協議はすぐコンセプト化しなければいけない。大使館から、「あなたの街では外国人をどういうふうに扱いますか」と聞かれた時に、パッと答えられないといけません。支援体制はどうなってますか。これから立ち上げるとしてもそこにゴールがなければいけません。それがしっかりしてないと途中でゴシップ性のものが出たとき、それが力を持ってこれらを破壊していくんですね。また、このジャーナリズムに対して、皆さんがどういうふうに対応するかということを日頃、考えられていたほうがいいということです。それから全国からの支援に対して我々がどういうふうな支援体制を望んでいて、皆さんから何をしてほしいかということを明確に伝えないといけません。

そこで作ったのは、この中のマニュアルで絵が書いてある一番上にあるのですが、緊急時の三角ネットです。これは本当は震災が起きて直ぐ手書きで書いたものをこうやっただけなんです。これはなぜこういうふうにしたかという、うちのスタッフに対して我々がどういう災害対策センターをつくるか、ということをおうふうにしなないとみんなと共有できないんですね。一番根っこに私たちも在住の外国の人もみんな被災者であるというこの枠を皆さんに是非、知ってほしいことなんです。そこから、ボランティアが出にくい、我々も活動しにくいという非常にハンディ負った中でやらざるを得ない。それが大きな町なのか、小さな町なのか旅行者なのか、流動人口が多いのか少ないのかでシチュエーションが変わります。ただ、大小が変わったとしてもこのシステムは僕は変わらないと思います。是非、一元化して全国に投げてそこで一元化してコーディネートして力のある人たちをうまく活用してここをおろしてくれるシステムが機能的

に立ち上がらないと災害の防災はできません。県も実は先ほどお話していたんですけれども、きちっと一生懸命やってられますが、県も実はあたふたして、人をみんなとられてしまうと最後に外国人のところが見捨てられてしまうんですね。リアリティは多分そうなると思います。そのときにどうするかというとやはり県を頼れない。地元の市町村がボランティアの人たちと一緒にやる。その大きなネットワークの輪を掛けてくれるのが県だと僕は思うんですね。それをどういふふうに日頃、連携システムをつくるかということです。それと一元化がされない例えば自分のところに電話がバンバンとかかかってきたら、もうパニックですよ。地元の外国の人からののが全然かからず、外部ばかりくるようになります。そうするとまったく支援できない。だから一元化して受け取るということがすごく大事です。

それからもう一つはボランティアの活用。これはいろんなところからでていただくと地理感がありません。特に壊れてしまうと道路標識も何もないですから、わからないですね。そうすると地元で分かる人たちが入ってくれないとだめなんです。そのときに近隣で長岡のこと分かる人たちが来てくれて一緒に入ると一人が分かって5人はそのサポートしてくれればこれは非常に力のあるユニットになるんですが、他所から来た人だけでやったらまず避難所がどこにあるのかも分からなくなってしまうという状況が発生しますから、地元とそうではないところとどういふふうにするか。

それからもう一つはボランティアというのは非常に不信感をもたれます。私なんかどちらかというと、ビジュアル系でなく怪し系の顔をしていますので、何だあいつは、なんて思われてしまうんですね。そういう傾向の方、結構ボランティアできてくれます。ボランティア用のベストを用意しても、そのベストを取りにいく暇がないです。ですから是非、皆さんに考えてほしいのは黄色い布のガムテープが一番いいです。安い、どこにでもある。それと、マジックです。そうすると冬であればコート着ます。でも建物に入れば脱ぎます。でもペタペタと貼って自分の得意な言語、それから自分はどこのボランティアセンターから来たか書いておくと色だけでまず日本人が安心するんですね。「ほらほら、あんた相談できる人がきたよ」って外国の人に言ってくればいいわけです。そのために一番安いツールはガムテープとマジックインキですね。これを使えば雨が降っても平気です。雪が降っても平気です。水の中も大丈夫です。これをいっぱい用意していただくということは一番いいと思います。

それからもう一つ、大事なことは私たちが信頼を得ない限りボランティアにはなれないということです。信頼を得るためにどうしたらいいかということで、巡回レポートを作りました。これ、

すごく大事なことです。いつ、どの避難所に誰が行ったかということを知るようにしてあります。ですから5人で行けば5人が手分けしたものが全部入ってくるんですね。外国籍の人たちは溶け込んでしまい、わからなくなりますから、誰が行っても分かるようにこの避難所のどこにどんなグループがおられるか、という位置図がとても大事になります。そうするとこのグループは帰られたな、とかその時にどこにいきましたかと、聞けるんですね。そういう追跡もしやすくなりますので是非、入れてください。それから、一度でも相談を受けたのに答えを翌日言わなかったら、不信感をもたれます。ですから必ずここに質問、相談事項を書いて申し送りをしておくと、別のボランティアが行ってもこの紙は永遠に継がれていくわけですね。そうすると皆さんからこのグループはちゃんとやってくれる人たちだと思われるんです。で、もう一枚めくっていただくと個人カルテというのがでてきます。これもすごく大事です。例えばお年寄り。病院も指定していつ、どういう薬を飲んで、ということがでてくるんですね。乳飲み子がおられたり、いろいろな個人的な深い課題が出たときには個人カルテを用意し、今度はきちとした通訳をつれて、しかも深い問題を全部理解してこないといけないんです。そのためには言語レベルもここにきちっと入れ、人のバックグラウンドがきちっとわかるようにします。それでこれは絶対に外には出せません、という約束をして、こまごまとしたプライベートなことを聞いて、次の担当に、翌日行くときにはこの人に目をかけてほしい、ということで申し送っていくと、とても信頼感をもたれますよね。これも一つのツールになると思います。これは私たちがつくった不完全なものなのですが、あの緊急の中ではこれしか僕らもできなかったんです。でもこれを作ったことで、共有がしやすかったです。この避難所の担当、と言われた瞬間にそのボランティアグループはそのファイルの一つ持っている、多言語でどんな情報がいつ配られたかなどが全部そこには入っていて、今日配るものもそこに入りますし、こういうツールも全部その中に入ってますから、それを見れば誰でもすぐスペシャリストになれるんですね。こういう、人の能力がパッと立ち上がるシステムをどういうふうに僕らは作るか、ということは大事だと思います。

私たちは、昼間にローラーをやりました。そうしたらいる人が少ないんです。ものすごく驚いたのは国籍のくくりでは、外国の人たちを助けることができないということです。覚えておいてほしいのは、ビザのカテゴリーです。お嫁さんなのか、研修員なのか、実習員なのか、留学生なのか、企業で雇用されているのか、全部違うんですね。ですからその人たちがどういうふうな生活をされているかというのを把握するためにはビザのカテゴリーから見て、次に言語分けをして行った方が、対策はとりやすいと思います。国籍でやると大変なずっこけ方をします。特にお嫁

さんの問題は、田舎では、お嫁さんの来てがないので、むしろ地域のコミュニティにも入れない高齢者が、お金を仲介して業者から仲介して若いお嫁さんに来てもらっている、というケースがあるんです。やって来る人は、大学を出てパートナー探しに夢をもって日本に来るんです。だからしっかりした方が多いです。来たら地域にも入れず、私はいったいどこに人間のアイデンティティを作ったらいいの、と。来たとたんに「うちの嫁」といわれて、こういうことから問題が起きるんですね。斡旋業者がよく使う手は、若い初婚の方ではなくて再婚の人を呼んでくるんです。そうすると奥さんが最初に来て、次に中学生くらいの子どもさんがくるんですね。就学の問題も実は大きな問題になります。ですから、こういう複雑な問題を我々が把握しておいて対策を立てないと、具体性のない紙に描いた餅になってしまうということなんです。私が体験をして一番大事だなと思ったのは、実は今のことなんです。必ず皆さんの地域特性を考慮する。絶対忘れてほしくないのは事前協議であるということと、自助努力ができることをどういうふうにするか、全てがここに繋がります。日常化しない国際化は防災にはなりません。その日常化とは多文化共生がどれだけ進んでいるかということです。だから相談業務がきちっとやられて、そこに相談できる仲間がいる、日本語支援してくれたり就学支援をしてくれたり、いろいろなことがやられていると、いざという時にきちとした体制に変わることができるのです。それだけ皆さんの中には、危機意識をもってきてられる方が多いんですが、行政は3日間はまったく機能しないと思ってたほうがいいですね。ですから行政の方は民の人が、どれだけ早く駆けつけてくれるかをまず立ち上げの中で考えてほしいと思います。

それからストラクチャーの立ち上げは行政のほうがずっといいんですね。これは信頼がおけます。民が集まってその組織を調整しているうちに一週間ぐらい経ってしまいますから。それからボランティアセンターは立ち上がるんですが、それとは別個に外国人支援センターつくったほうがいいと思います。なぜなら区分しないと大事なボランティアが全部そっちに登録されて取られてしまうからです。ですからこっちは別だということで別枠を作られたほうがいいと思います。そして、スーパーバイザーの育成、これを是非やっていただきたいと思います。もう一つはその下の何人かのコーディネーター。コーディネーターはその地区で業務調整をする人のことをいいます。ですから何段階かでこう大きな組織は下がっていくということなんです。必ず最後は一人が全体を把握できるというふうにしておくことが大事です。ボランティアの方も私のところに実は緊急援助隊の若手が来てくれると言ったのです。こういうのも手なんですね。緊急援助隊、国外向けで国内には来ないんですが彼らがボランティア休暇を一人5日ずつとりまして、これは

企業ボランティア休暇ですよ。このシステムを僕は決して忘れないでほしいと思います。説明する暇がないから、とりあえずスーパーバイズできる人に来てもらって、現地を見てもらって体制も含めて人選も全部やってもらいました。そうするとその人をお願いしただけで、私たちのどこに彼らのはまってどういう業務ができるかを、すぐ判断してくれたんですね。こういう人たちのグループはネット化しておかないとだめです。私がすごいなと思ったのは、ホテルはNHKがだいたい借り上げてしまい、タクシーも借り上げてしまっただけで使えなくなってしまう。ホテルがようやく一部屋とれた。そうするとこの若手が避難所の夜の勤務をする人と、家へ入る昼間の人と、このたった一部屋を交代で夜と昼使ってくれたりという工夫をしてくれたりしました。それと、コンピュータを持ってきて書類でドキュメントづくりをする人も必要です。私も実は皆さんに「我々こうやりました」という映像をお見せしたかったんですが、気が付いたら一枚も写真が撮っていませんでした。そんな暇なかったんですね。記録として次に手渡せなくなるので、是非、手渡せるようにしてほしいと思います。日本は災害大国なんですけど、これからはみんなが経験を共有しながら一緒に手を携えていくことで防災大国にならなければいけないと思っています。だから11月に入って我々は被災した人たちからまず、アンケートを取りました。また、震災復興のフォーラムを2月27日に長岡でやったんですね。長岡はこういうかたちでお礼をしたいなと思ったんです。ですから皆さんとこうやってお話をさせていただくというのは僕らとしては一番ありがたいことです。こうやっているんな力をいただいた。今度は僕らがその経験を皆さんに少しでも手渡して生かしていただきたいのです。ですからこういうのもホームページでアップしてありますから是非、参考になさって意見があれば言ってください。でもこれ、作るのに一年かかりました。長岡造形大学にきた博士課程の留学生が毎週、私が文句を言うのを聞いてくれたんですこれ。文句はどこからくるかということ、うちへ出入りしている外国籍の人たちに、これはわかりますか、どうですかと、意見を聞く。それをすぐフィードバックして、これができました。彼は今、災害時のピクトグラムということを研究課題にしてしまったんですね(笑)。

もう一つ私、言い忘れた大事なことがあります。言語通訳の前に文化通訳がものすごく大事になります。イスラムの方はお祈りが全てになってきますから、祈る場所を確保してあげなければいけない。それから中国の方は緊急時には人を信用しません。うちの相談員が私が、「どうやって援助をしようか」と言ったら「いいのよ羽賀さん、放っておけば、中国人は一人で生きていくから。中国はね、何か一応、事が起きたら自分以外は信用するな」というのがあるからみんな一人で生き抜きますから」と言われたんですね。なるほどという事実がありました。避難所に入った

方が毛布の独り占めと、おにぎりの独り占めを行ったんです。その上に座っているんです。それは悪気があるんじゃないくて文化的な違いなんですね。一人で生き抜くために、何日か分を確保しただけなんです。そうしたら日本側と一触即発状態になりました。私は、日本人には、「中国の方は、こういう文化で一生懸命生き抜くための手法である」と説明し、中国人には、「日本は、みんなこうやって並んで同じに分け合うから、心配しないでほしい」と言いました。そして、一緒にボランティアをやってもらったら打ち解けました。

こういうことはたくさんあります。ブラジルの方に通訳をお願いしたところ、「羽賀さん、いくらくれる?」と言われてショックを受けました。これは全然悪いことでもなんでもなくて文化なんですね。中国の方にも「いくらくれる?」と言われたんですが、もう本当に2、3日経ったら皆さんが私、ボランティアさせてください、と。そういう文化が本当にあるかないかの違いなんですね。だからこういうときにはそれを説明してあげなきゃいけないし、お互いに誤解があったときにはその誤解を取り除いてあげるということは文化通訳としてとても大事です。

山古志村に、中国の窃盗団が50人入った、という噂が流れたんです。こういうのが、すぐ尾ひれがついて100人ぐらいの集団に変わるんです。釣り師の魚はこんな釣ると毎日成長して一週間後にこんな魚に変わるのと同じです。ですからスーパーバイザーと僕が言ったのは、情報がここから出ていることと、ここに入るということで皆さんに正しい情報の出入りができることがすごく大事だということです。

それからもう一つNHKさんのお話をさっきしたんですが、NHKさんというのは実は23の言語に対応する部門があります。そうすると同じ映像を23部門が撮りにくるんです。私は一つがきてそれを共有するんだと思ったら違うんです。ということは同じ人に23回同じ映像を撮らしてくださいと。外国籍の人はただでさえ、ショックなわけです。それに疲れて怖いところに映像を撮らしてください、と。1回はいいですけれど3回、4回、10回って、もうだめですね。隣の日本人も嫌がるんです。ライト点けてテレビカメラでくる。皆さん嫌がる。でも私、NHKが取り上げてやるのに、とNHKに怒られました。その映像を撮られることはもう嫌だって皆さんおっしゃってます、と私が言ったら、「お前が止めているんだろう」と言ったから、「それも」と言ったら何と一日41回も私の電話が鳴ったんです。私、最後には殴りにいったら、うちの職員が必死に止めたんですね。もういい、僕等も被災者だ、と。実はNHKだけで何件もあったんです。だから皆さんも気をつけられたほうがいいです。ジャーナリズム災害が半分はその災害の上ののっかってくるということを是非、肝に銘じておいてください。

弱者になるのは外国籍の人たちです。それを面白、可笑しく撮られないように守ってあげなければいけない。守るというのは、その人たちを直接守るということの他に、情報を整理して守るということもあるということだと思います。

編集者注：本稿は、ご講演いただきました羽賀講師に、講演記録をもとに改めて加筆・修正をお願いしてとりまとめました。